

真つ青な顔をしてふらふらで参詣し、挨拶にこられたから「どうしたのですか」「信仰が苦になって睡られず、食事もないのでございます」「私の方へ入院しませんか、お産が近うなりましたね」「まあ、子供を産む年ではありません」「久遠劫から流転を続けているときは、焰の中にも幾万劫、氷の中にも幾万劫と、親様があなたの心の中の怒りや欲に閉じ込められていたのが、ようやく宿善開發でお出ましになることですよ」「お宅に寄せていただきますからお願います」

神戸から帰ったときに来ていた。次の日から門司の三光寺にゆくので一緒にゆき、帰途鎮西橋で電車を待つとき「信仰が崩れて何にもわからなくなりましたが死にましようか」「お死になさい。下関の夜景の見えるこの海に飛込みなさい、私は止めませんよ」「死んだら地獄に堕ちるではありませんか」「今まで参る稽古ばかりしていたのですから、第十八願は本当に堕ちる柄を知らしていただくのです」「堕ちともないから聞くのではありませんか」

「聞けば聞くほど堕ちる柄が知らされるのです。皆のものが、堕ちない間に助かろうたすかろうと地獄を恐れ極楽を願うているのは、悪い心を出さないようにして、ありがとうなつてゆこうとする自力ですよ。聞いても知つても覚えても、凡夫の智恵で計らうているのだから駄目であったと、望みの綱が切れたときに自力の機執が捨たつて他力不思議に攝取されたときなのです。堕ちるものをお助けおたすけと言っているのは言葉の真似をしているのですから、叩いたら痛からういたかろうと言っているのと同様で、叩いたときでなければ痛さを感じない。痛いと言わない先に痛いのでもなければ、痛いというて後に感ずる痛さでもない、同時です。光がついて闇がそろそろ逃げるのでもない、闇が逃げてそろそろ光がくるのもない、同時ですけれども、話すときは、光が点いたから闇は逃げたので、攝取されたときは自力の機執は浄尽されているというのです。後生はひとり凌ぎです、誰も手助けはできません。聖人様もあなたの身代わりはできません。

それに真宗では、わたしが修行も戒行もできないということを知らすために、聖人が二十ヶ年の修行をし、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかし、といわれ、五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけりと、おっしゃって、私の身代わりをしてくださったとは有り難いと言っているが、親鸞一人がためなりけりと言っておられて、末代の衆生の身代わりとは書いてないではないか。聖人は実地の求道をして親に逢うて喜ばれたのであり、末代の人々は書物に書いてあるのを合点して喜んでいるのですから桁が違いはしませんか。

机上の空論、観念の遊戯をして自分の感情が調子を合わせているだけです、演習と実践とは違いますよ。ご飯を食べたら満腹すると知って信じたので満腹しましたか。電気が点れば明るくなると知って信じたので明るくなりましたか。難破したとき救助してもらえば助かると知って信じたので助かりますか。蓮如上人が、あら心得やすの安心やと仰ったと知って信じたので安心ができましたか、聖人の体験を語るのには、この道を通れば三願転入して撰取されると仰ったのは、ご教化であって、三願を転入しましたか、撰取されましたか。話がわかるのは易いが実地が通れないのです。聖人の体験を通してあなたの体験でなければ仏凡一体にはなれないのです。そう信じたらよいと言いますが、そう信じたらよいのですが、合点しただけでそう信じてはいません。その証拠には「無上妙果の成じ難きにあらず、真実の信樂、実に獲ること難し」「無上の功德値遇し難く、最勝の淨信、獲得し難し」と仰せられてあるが、一度も難しいと思つたこともなく、誰も難しいと語る人もないのだから、聖人さまの教えを如実に実行している人は一人もいないのですから、同じ証果を得る人は一人もいないのです。そう思っているだけです。賈物も賈物、言葉の真似をしていただけです。

真剣に宗教を聞き、如実の信を得ようと求道するものはいなくて、他力廻向だ、宿善が厚いから素直にいただいたと話の理解のできたのを不思議の仏智と自惚れて、食べたい放題食べ、寝たい放題寝て、聖人と同じ境地に立てると思つているのでしょうか。簡単に話を聞いているだけだから、極重の悪人大慶喜を得てとか、無上の信心を得れば大慶喜を得るとおっしゃつ

であるが、真剣に求道していないのだから大慶喜のないのが当然でしょう。お言葉の真似をしているだけだから贗物の信心でしよう、自分だけが攝取されたつもりで自惚れているだけだから信前も信後もわからず、真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失するといわれてあるがそのとおりです。ぼんやりしているのを得難い他力の信仰を得たと自惚れているのです。

聖人は、この道を通れば果遂の誓いのお蔭で信樂開発して信心と凡心とが一つになれると教えられ、蓮師はもろもろの雑行雑修自力の心を振り捨てて乃至たのむ一念のとき、と仰せられてあるが、このたのむ一念の極意を突破さしていただいたものがいないのだから信前信後を語るものがいないのです。流転の絆の切れたときは、疑惑仏智と明信仏智と天地の相違があるのですが体験した人がいないのです。三百八十余人から唯信独達（信一念の邪義）の悪魔の説だと総攻撃を受けられたのは無理はない。昔も今も牛羊眼が多いから心眼を開いた人はいないのです。

自分が食べねば自分の腹には入りません、妙好人伝に載っている人は人並以上の苦しみを嘗めた人なのです。難中の難を通らなければ自力の機執は捨たりません。

宮本さんは毎日竹本同行のところへ行つては泣き泣き帰ってくる。「私には何にもわかりません」、「ついに泣く涙までもなくなつて、食べているのやら、寝ているのやら、「私は極楽の望める柄でありませぬから元の古巢へ帰ります」「そのまま来いとはふるす古巢へ帰る素地のままが唯なのです。その素地と離れきらない親がいるのに、なろう、ただこころ、なれんなれんとあせつたのが自力で、墮ちるままが唯なのです」「唯とは八方塞がりのままでございますか、噴き出る煩惱のまま、私を離れぬ親さまでございますか、無間のどん底に飛込むままでよかったですか」不思議の親に逢うたと大喜び、とり乱して喜んでいましたが、称名は溢れるほど出てくる。「すまなんだすまなんだ 親様を苦しめたのは私一人でございました。私一人の五兆の願行でございました、親様を恨み呪うた私が一人子でございました」一時間ぐらいのちに「お彼岸が近いからお説教がすむまで置いてくださいませんか」「いけません。全快したのですから退院しなさい、家族の方は首を長くして待っておられます。来月は

あなたの檀那寺に三日間ゆきます」その晩大きな荷物を持って帰るので「こんなに荷物を持ってきたのですか」「着ているのが冬物、セルも夏物も持ってきて、三年でも五年でも開発するまでは置いていただくつもりでした」

檀那寺へ行ったら一番先に参詣した。「弁円がなんとか歌を詠みましたね」

山も山道も昔に変わらねど

変わり果てたる我が心かな

「そうそう、あなたのところへ行くときは上り列車、帰るときは下りの列車、同じ線路（単線）ですが、上りのときの淋しさ苦しきは譬えようがない、どん底に落ちてゆくような気持ち、下るときは十方が晴れて花園の中を散歩させていただくような楽しさ、こんなに天地の違いがあるものかと喜びました。裏口の戸を開けて入ったら、夕食を終わって私の噂でもしていたのでしよう、主人は私の脚元ばかりじっと眺めているのです。開発するまでは何年でもいると行ってでたのに、余り早く、五日で帰ったから幽霊ではないかと思つたのでしよう。私はお仏壇の前にゆき「家の仏様を死に者にしてみました、唯の唯とはこゝも易い他力でございましたか、あれだけ苦しまなければ久遠劫からの自力の執着は離れないとは、親さま申訳がありませんでした」と、お礼を申し上げているときには、家族のものは私の後ろで遠巻きにしているのです。今度は下座から主人の前に手をついて「ご不自由でございましたでしょう、よく出していただきましたので、無明の大病が全快して帰らしていただきました」つぎには母に向いて「洗濯から炊事までご苦労かけました、これからは楽をしてください」と挨拶をしたら、一番下の六歳になる娘が飛びついてきて「お母ちゃん安心して帰って来たのか」と申しますので抱きしめて泣きました。毎晩一時二時ごろまで私が働きますので、主人が眼を覚まして「まだ起きていますのかい」「信仰を求めるとは言いながら、仕事が遅れていますから」と言ったら「お前が求道に出てから三日の間に、親族や友達に田も畑もみな貸すことに約束をした。一週間も経たぬ間に帰って来たから、直ぐに田畑を返せとはいえない。今年は何にもせんでよいから俺も寺参りをさせ

ていただくこう」と言いましたときには声を挙げてなきました。

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

發起せしめたまいけり

私一人を照育するために、夫となり子供となつて私を宗教的に指導して下さったとは、遠く宿縁を喜ばずにはいられませんでした。

その娘の子が神戸でご縁のあるときは、他の新しい同行を車に乗せて参詣していますが、ご法義は糸を引くものだと合掌させられています。